

## 第四十節の隠された歴史 — 第二十五号

### エゼキエル その六

Jeff Pippenger

2026-08-11

私はこれまで、聖所におけるエゼキエル、イザヤ、そしてヨハネの経験に関連して、さまざまな真理の筋道を提示している『証の書』の一節を用いてきた。ヨハネは黙示録第一章において、自分の後ろで語る声を見ようとして振り向いた。

私は主の日に御霊に感じ、私のうしろで、ラッパのような大きな声を聞いた。こう言うのである、「わたしはアルファでありオメガである。最初であり最後である。あなたを見ることを書物にしるして、アジヤにある七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送れ。」そこで私は、私に語りかけるその声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。黙示録 1:10-12。

パトモスの島から、そしてさらにヨハネがキリストの幻を見た天の聖所へと至るその幻は、ホワイト姉妹が私たちに告げているところによれば、ダニエルがその書の第十章で見たのと同じ幻である。

「そのころ、私ダニエルは三週間のあいだ嘆き悲しんでいた。私は美味しいパンを食べず、肉もぶどう酒も口にせず、また全く身に油を塗らなかった。……そのとき私は目を上げて見た。すると見よ、亜麻布をまとい、腰にウファズの純金の帯を締めたひとりの人がいた。その体は緑柱石のようであり、その顔は稲妻の現れのようにであり、その目は燃えるたいまつのようにであり、その腕と足は磨いた青銅の輝きのようであり、その言葉の声は群衆の声のようであった」（ダニエル10:2-6）。

「この描写は、キリストがパトモス島においてヨハネに示されたときに、ヨハネによって与えられたものと類似している。神の御子にほかならぬお方がダニエルに現れた。われらの主は、もう一人の天の使者とともに来られ、後の日に起こるであろうことをダニエルに教えられる。」『Sanctified Life』49頁。

最初の九節は、人類の恩恵期間が終わる直前に、いかにしてイエス・キリストの黙示が開封されるかを示している。その黙示は神からイエスに与えられ、イエスはそれをガブリエルに与え、ガブリエルはそれをヨハネに与え、ヨハネがそのメッセージを七つの教会に送るよう委任した。イザヤも第六章において同じことを行うための委任を受け、エゼキエルも第二章と第三章において同じ使命を受けた。ヨハネはその委任を受けた時には囚人であり、エゼキエルとダニエルはバビロンの捕囚であり、イザヤはユダの悪しき王アハズの時代に生きていた。

「車輪の中にさらに車輪があり、その構成はあまりにも複雑であったため、ひと目には、それらはすべて混乱しているようにエゼキエルには見えた。しかし、それらが動くときには、驚くべき正確さをもって、しかも完全な調和のうちに動いた。天の存在たちがこれらの車輪を動かしており、そして何よりも、その栄光に満ちたサファイア

の御座の上には永遠なる方がおられた。しかも御座の周囲には、恵みと愛の象徴である、取り巻く虹があった。その光景の恐るべき栄光に圧倒されて、エゼキエルはひれ伏したが、そのとき、立ち上がって主の言葉を聞けと命じる声があった。こうして彼には、イスラエルに対する警告の使命が与えられた。」『Testimonies』751頁。

また私は主の御声がこう言われるのを聞いた。「わたしはだれを遣わそうか。だれがわたしたちのために行くだろうか。」そのとき私は言った。「ここに私がおります。私を遣わしてください。」イザヤ 6:8

「この幻は、エゼキエルの心が暗い不吉な予感に満たされていた時に、彼に与えられた。彼は、その父祖たちの地が荒れ果てて横たわっているのを見た……」

「これと同様に、神は、後の時代にわたる教会の歴史を愛されたヨハネに示そうとされたとき、燭台の間を歩いておられる『人の子のようなお方』を彼に現すことにより、救い主が御自分の民に寄せておられる関心と配慮の確証をお与えになった。燭台は七つの教会を象徴していた。…」

「これらの教訓は、私たちの益のためである。私たちは神に対する信仰を堅く保つ必要がある。なぜなら、今まさに私たちの前には、人々の魂を試す時があるからである。…」

「わたしたちは、重大かつ厳粛な出来事の敷居に立っている。預言は急速に成就しつつある。主は戸口に立っておられる。生けるすべての者にとって圧倒的な関心と呼ぶ時期が、まもなくわたしたちの前に開かれようとしている。過去の論争は再燃し、新たな論争が起こるであろう。わたしたちの世界において演じられる諸光景は、いまだ夢にも見られていない。サタンは人間の媒介を通して働いている。憲法を改変し、日曜日遵守を強制する法律を確立しようと努めている者たちは、その結果がいかなるものとなるかをほとんど理解していない。危機はまさにわたしたちの上に迫っている。」

「しかし、この大いなる危機にあって、神のしもべたちは自分自身を頼みとしてはならない。イザヤ、エゼキエル、そしてヨハネに与えられた幻の中に、天が地上で起きている出来事といかに密接に結びついているか、また神に忠実な者たちに対する神の配慮がいかに大いなるものであるかを、私たちは見るのである。この世界は支配者なくしてあるのではない。来たるべき諸事件の計画は主の御手のうちにある。天の大君は、御自身の教会に関する事柄と同様に、諸国民の運命をも御自身の管理のもとに置いておられる。…」

「エゼキエルの幻において、神はケルビムの翼の下に御手を置いておられた。これは、彼らに成功を与えるのは神の力であることを、神のしもべたちに教えるためである。もし彼らが不義を取り除き、心と生活において清くなるならば、神は彼らと共に働かれるのである。

「稲妻のような速さで生き物たちの間を行き巡る明るい光は、この働きがついには完成へと進められていくその速さを表している。…」

「兄弟たちよ、今は嘆きと絶望の時ではなく、疑いと不信に身を委ねる時でもない。キリストはもはや、大きな石で閉ざされ、ローマの封印をもって封じられたヨセフの新しい墓の中におられる救い主ではない。私たちには復活された救い主がおられる。主

は王であり、万軍の主であられる。主はケルビムの間に座しておられ、諸国の争闘と騒乱のただ中であっても、なお御自分の民を守っておられる。天において統べ治めておられる方こそ、私たちの救い主である。主はあらゆる試練を量られる。主は、すべての魂を試さねばならない炉の火を見守っておられる。王たちの要塞が打ち倒される時、神の怒りの矢がその敵の心を射抜く時にも、神の民はその御手のうちにあって安全である。」『Testimonies』第5巻、752-754頁。

四つの聖書的証言は、イエス・キリストの黙示のメッセージが、これらの預言者たちの聖所における経験によって予表される人々に与えられるものであることを証ししている。わたしたちが天の聖所に入るとき、わたしたちは、自ら宣べ伝えるよう定められているそのメッセージを与えられるのである。「すべての魂」を試みる「炉の火」とは、マラキ書第三章の炉なのである。

しかし、だれがその来臨の日に耐えられようか。だれがその現れるときに立ちえようか。彼は精錬する者の火のようであり、布をさらす者の灰汁のようだからである。彼は銀を精錬し清める者のように座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように純化する。こうして彼らは、義をもって主にささげ物を献げる者となる。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日のように、また過ぎし年々のように、主に喜ばれるであろう。マラキ 3:2-4

銀を精錬する者は、その銀が自らの顔を映し出すほどに純化されたとき、銀が炉の中に置かれるべき正しい時間を経たことを知る。銀が古代においてどのように精錬されたかに関するこの事実は、ダニエルが第十章で見た使役動詞「marah」と一致している。これら終わりの日にあって、主は御自分の民を聖所へと導き、十四万四千人の旗じるしの一部となる候補者たちを試し、清め、練り清めておられる。この期間において、「もし」わたしたちが「不義を取り除き、心と生活において清くなる」ならば、「主は」私たちと「共に働かれる」であろう。ダニエル十章にあるように、この経験から逃げ去る者たちもいるが、ダニエルによって象徴される者たち、すなわちイエス・キリストの啓示という大いなる鏡の幻を見る者たちは、イザヤが示しているように祭壇からの炭でその唇に触れられ、背教した教会に対して、そして次いで世界に対して、一つの使命を伝えるために清められ、備えられるのである。

このメッセージは、聖所にいる忠実な魂たちに提示されている。レビ記二十三章は、ペンテコステの季節と符合させるとき、至聖所にある契約の箱を反映するように構成されている。信仰によって、この章の諸メッセージの構造は、炉の試練が成就する聖なる歴史のうちに三つの道標を示している。神的に深遠である——第二十三章の預言的構造は、預言を学ぶ者が第一章第一節においてエゼキエルを見いだすことを可能にする。

さて、第三十年の第四の月の五日に、わたしがケバル川のほとりで捕囚の民の中にいたとき、天が開かれ、わたしは神の幻を見た。その月の五日、それはエホヤキン王が捕らえ移された第五年であった。エゼキエル 1:1, 2.

十四万四千人の封印の時における祭司として、エゼキエルは第十七ヨベル周期の第三十年にあり、それは紀元前587年におけるネブカドネザルによるエルサレム三度の包囲のうち第三の包囲の五年前である。この節における第三十年は、旧約聖書史上最大のリバイバ

ルから三十年後であり、しかもそれは第五年の第五日に当たっている。したがって、数字の五がエゼキエルの証言の上に置かれているのである。冒頭の二節において、私たちは第三十という数が一度特定され、数字の五が三度言及されているのを見る。ペンテコステの季節に一致するレビ記二十三章の構造において、三十によって表される第二の試みはラッパの祭りにまで及び、五日はキリストの昇天に、さらに五日は贖罪の日に、さらに五日は先の雨（ペンテコステ）と後の雨（仮庵）との両方を表す道標に達する。その構造は、三十に続いて、五の三つの段階を提示している。エゼキエルは神殿の中におり、レビ記二十三章の構造は箱である。

その歴史は、この時点におけるエゼキエルが、エルサレムの滅亡によって表象される、まもなく到来する日曜法を予型的に示して終結する象徴的包囲の五年前に在るという事実を証ししている。『五』という数は、『三十』という数と同様に、レビ記二十三章の構成における主要な要素である。

本章の最初の二十二節を最後の二十二節と対応させ、さらにその二つの二十二節の系列を五旬節の季節と対応させるとき、三段階の試験の過程、すなわちマラキの炉の火が、これらの記事において明確に示されていることが明らかにされた。三つの段階のうち、第一段階と第三段階にはアルファとオメガがあり、それは一つの段階を表す四つの道標の連なりから成っている。

過越、続いて種なしパンの祭り、続いて大麦の初穂のささげ物、そして種なしパンの祭りの終わりまで「五」日。これら四つの道標が第一の試験を構成しており、イエスは常に終わりを初めによって例証されるのであって、第三の試験もまた四つの道標によって構成されている。ラッパの祭り、それからキリストの昇天、続いて贖罪の日、そしてその五日後にペンテコステと仮庵の祭りの双方の到来である。ペンテコステは前の雨の象徴であり、仮庵の祭りは後の雨の象徴である。レビ記二十三章のモデルにおいては、ペンテコステと仮庵の祭りはともに整列する。

シオンの子らよ、そのゆえに喜べ。あなたがたの神、主にあって楽しめ。主はあなたがたに、ほどよく秋の雨を与え、またあなたがたのために雨を降らせてくださる。すなわち、初めの雨と後の雨とを、初めの月に。ヨエル 2:23。

最終的な試験と清めの過程は、2023年12月31日に始まった。最初の試験は、2020年7月18日の失望によって以前に試みられていた集団を分裂させた、「あなたの民のうちの強奪者たち」の論争によって象徴される、基礎的な試験であった。

「歴史と預言において、神の御言葉は、真理と誤謬との長く継続してきた闘争を描き出している。その闘争はなお進行中である。かつてあった事柄は繰り返されるであろう。古い論争は再燃し、新しい理論が絶えず起こってくるであろう。しかし、自らの信仰と預言の成就において第一、第二、第三天使の使命の宣布に参与してきた神の民は、自分たちの立つところを知っている。彼らは純金にもまさる尊い経験を有している。彼らは岩のように堅く立ち、初めの確信を終わりまでしっかりと保つべきである。」『Manuscript Releases』第1巻、47頁。

レビ記二十三章において、第一の試みは、三つの出来事の預言的結合によって表されており、その五日後に除酵のパンの終わりが続く。過越は第一日であり、除酵のパンの祭り

は第二日であり、初穂の奉献は第三日であった。さらに五日後、除酵のパンの祭りは終わった。三つの試みのうち第一の試みの預言的構造は、第三にして最後の試みにおいても表されている。その第三のウェイマークは、三つのウェイマークに一つが続く形から成っており、ラッパの祭りが第一日であり、その五日後にキリストの昇天があり、さらにその五日後に贖罪の日が続き、さらにその五日後に、ペンテコステと仮庵の祭りの両方が、まもなく到来する日曜休業令を示すしとなる。それはエゼキエル書において、エルサレムの滅亡として表されている。

種なしパンの祭りの終わりとラッパの祭りとの間には三十日があり、それは祭司の象徴を表すだけでなく、神的な図示の中に表されている三つの試みのうちの第二の試みをも表している。

キリストのバプテスマは、過越、種なしパン、初穂という三つの道標を例証している。これら三つの道標は、キリストの死、埋葬、復活を表しているからである。これら三つの段階に続いて、五日を経て第四の段階に至るが、それは種なしパンの祭りの終わりによって表されている。バプテスマは、ヨハネが自らのメシアにバプテスマを施したその短い瞬間のうちに、この三つの段階を提示している。春の祭りはこれら三つの段階をそれぞれ一日ずつ隔て、秋の祭りはこれら三つの段階をそれぞれ五日ずつ隔てている。

春の祭りの第一の試験を、三つの道標の組合せとし、その五日後に一つの道標が続くものとして適用し、さらに秋の祭りを、三つの道標の後に五日後に一つの道標が続くものとして適用するとき、そこには、一つのアルファの道標である「三」に五日が続き、その後三十日が続き、さらに秋の祭りの第三の試験として、「三」の道標の後に五日が続くという預言的構造が確立される。この構造は、第一の試験が合計五日を包含し、その後三十日の第二の試験が続き、それが五日の第三の道標にまで達することを示している。五に三十を加え、さらに五を加えると四十である ( $5 + 30 + 5 = 40$ )。

キリストのバプテスマの直後には四十日間が続き、それは三つの試みをもって終結した。ペンテコステの季節と組み合わせてレビ記第二十三章の構造のうちに、さらに多くのことを認めることができるが、別の次元においては、この章は至聖所にある契約の箱を表している。

レビ記第二十三章における春と秋の祭りは、二つの安息日の中間に置かれている。これら二つの安息日は、二人の覆うケルビムを表しており、また、レビ記第二十三章と一致するペンテコステの季節の道標は、箱と二人の覆うケルビムを表している。エゼキエルは第一章において聖所へと連れて行かれるが、そこへ連れて行かれた時、彼はエルサレムの滅亡へと至る包囲の五日前に位置しており、その包囲は間もなく来る日曜法を予表している。日曜法は、レビ記第二十三章におけるペンテコステと仮庵の祭りによって表されている。エゼキエルは第三十年にあり、三十という数は、マラキ書三章の炉の火を構成する三つの試験のうち第二の試験の期間である。第二の試験は三十日によって表されており、ちょうどエゼキエルが、歴史家たちがヨシヤのたいなる過越と呼ぶところのものに始まった第十七ヨベル周期の第三十年に在ると同様である。エゼキエルは十八か月続いた包囲の五年前にあり、しかも彼は神殿の中にいるが、それは残れる者を清め、練り清める最後の三つの試験の中間である。ペテロもまたカイザリア・ピリピ（パニウム）にあり、同じく

三つの試験の中間にあったが、それはパニウム（カイザリア・ピリピ）、変貌の山、そして十字架によって表されている。

紀元前592年に、エゼキエルは超自然的に「口がきけなく」され、神がその口を開かれるときにのみ語った。その状態は、紀元前585/6年のエルサレム陥落に至るまで続いた。包囲が始まった日に、すなわち彼の「目の慕うもの」が死んだ日に、神は彼に語らせたが、イスラエルの「目の慕うもの」であるエルサレムが陥落するまでは、彼が自由に語るとは許されなかった。エルサレムの陥落は、まもなく到来する日曜法を表している。そしてそこに、神殿で奉仕している間に口がきけなくされた第八組の祭司、すなわちバプテスマのヨハネの父がいるが、その神殿こそ、エゼキエルもまた（幻のうちに）いた場所であり、彼もまた約九か月の間、口がきけなくされたのである。ヨハネの誕生後八日目、ヨハネが割礼を受けていたとき、彼は語ることを許された。聖所にいる間に口がきけなくされた二人の預言者。聖所においてキリストを見ている間に口がきけなくされた第三の預言者はダニエルであった。第十章において、ダニエルは聖所におり、三度のうち二度目に触れられているちょうどそのとき、彼は口がきけなくされる。中間点において、ダニエルは口がきけなくされる。

彼がこのような言葉を私に語ったとき、私は顔を地に向け、口をきけなくなった。すると見よ、人の子らに似た者が私のくちびるに触れたので、私は口を開いて語り、私の前に立っている者に言った。「わが主よ、この幻のゆえに苦悶が私を襲い、私は少しの力も保てませんでした。」ダニエル 10:15, 16.

## 語ること

「語る」という象徴は、まもなく到来する日曜法の時に明示される。その時、合衆国は竜として語り、バラムのろばは語り、ハバククの幻は語って偽らない。聖所にいる間、口をきけなくされた三人の無言の預言者たちは、エルサレムの滅亡の時に語る。ザカリヤにおいては、彼が語ることによって、自分の子の新しい名が正しいことを示し、こうして新しい名を与えられるフィラデルフィアの人々を予表する。

勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱としよう。彼はもはや決して外に出ることはない。さらに、わたしは彼の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都の名、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書き記そう。黙示録 3:12

ザカリヤは、ヨハネの新しい家族名を書き記すための書き板を与えられた。

さて、八日目になって、人々は幼子に割礼を施すために来て、その父の名にちなんでザカリヤと名づけようとした。するとその母は答えて言った。「いいえ、ヨハネと呼ばれなければなりません。」人々は彼女に言った。「あなたの親族の中には、その名で呼ばれる者は一人もいません。」そして父に合図して、この子を何と名づけたいのかを尋ねた。すると彼は書き板を求めて、「その名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。するとたちまち彼の口が開き、舌も解かれて、彼は語り出し、神をほめたたえた。ルカ 1:59-64.

ヨハネの新しい名はフィラデルフィヤの教会に対応しており、またザカリヤという名は、第三天使の使命に対するザカリヤの不信として表されるラオデキヤに対応している。すべての預言者は終わりの日々について語っており、終わりの日々とは第三天使の歴史である。したがって、その使命をもたらした天使は第三天使でなければならない。ザカリヤは、主がラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会を通り過ぎられることを理解しようとしなかった。これらの預言者における声の回復については、さらに語るべきことがあるが、ここでは引き続きヨシヤの預言的系譜の理解へと進んでいくことにする。

## ヨシヤの輪

私たちは、紀元前622年のヨシヤの過越に始まる第十七ヨベル周期について扱ってきたが、ヨシヤの系譜は紀元前622年よりもはるか以前に始まっている。イスラエルが反逆してサウルをイスラエル最初の王として王座に就かせたことは、王サウルが統治する四十年を画し、続いて王ダビデが統治する四十年があり、さらにソロモンが統治する四十年が続いた。預言者サムエルをいたく憤らせたその神の拒絶は紀元前1097年に起こり、ユダヤ人たちが「自分たちには王はなく、ただカエサルがあるのみだ」と言い放った十字架において終わる、反逆の預言的系譜を開始するのである。

しかし彼らは、「除け、除け、彼を十字架につけよ」と叫んだ。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、私が十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「カエサルのほかに、私たちに王はありません」。ヨハネ 19:15。

紀元前1097年に、三人の王がそれぞれ四十年間統治し、紀元前977年のソロモンの死に至った。そのとき、王国は北と南に分裂した。

その後、彼らは王を求めた。そこで神は、ベニヤミン族の人、キシユの子サウルを四十年間彼らにお与えになった。使徒 13:21。

ダビデは王となったとき三十歳で、四十年の間、王であった。ヘブロンにおいては七年六か月の間ユダを治め、エルサレムにおいては三十三年の間、全イスラエルとユダを治めた。サムエル記下 2:4, 5。

ソロモンの治世は紀元前971年に始まり、神殿の基礎はソロモンの第四年（紀元前967年）に据えられた。建設は七年間続き（列王記上 6:37-38）、神殿はソロモンの第十一年の第八の月に完成した。正式な奉獻は第七の月（エタニムの月）、仮庵の祭りの時に行われた（列王記上 8:歴代誌下 5-7）。王たち、神殿、そして国民は、それぞれ歴史の中で四百九十年の期間によって表されており、それは王たち、神殿、あるいは国民のいずれかに関連して、預言的期間を明確に示している。

ダニエルは紀元前607年に捕囚とされた。もっとも、聖書年代学者の大多数は紀元前605年を同定している。歴史的記録は預言的証言と一致していなければならない。また、紀元前1097年における王を求める願いに始まる歴史の線上に歴史的に刻まれている諸出来事の象徴性は、いくつかの預言的証人に対して、紀元前605年ではなく紀元前607年こそが正確な適用であることを要求している。紀元前607年は、王たちの系譜における四百九十年の終わりを画するが、同時に、その線上に現れる七十年の三つの主要な表象の一つの始まりでもある。紀元前607年は、紀元前677年のマナセの捕囚をもって始まった七十年の終わ

りをも画する。四百九十年という象徴の最初の表象（その線上に三人の証人を有するもの）は、七十年の三つの証人のうちの一つが終わり、別の七十年の証人が始まる地点で結論に達するのであり、その数学的構造は、ダニエルが紀元前605年に捕囚とされたという考えにもかかわらず、紀元前607年を証ししている。

紀元前1097年から紀元前607年までの王たちに関連する490年の期間を含むその系統の中には、ソロモンの神殿の奉献から、捕囚後の神殿がゼルバベルによって紀元前516年に奉献されるまでの490年もまた含まれている。その490年は、ソロモンがその第十一年に行った奉献からの420年に、捕囚の期間中、神殿が荒廃していた70年を加えたものであり、合計して490年となる。アルタクセルクセスの第三の勅令は、その59年後の紀元前457年に出され、神の民のために「定められた」（切り取られた、Daniel 9:24）490年の始まりを画しており、それはステパノの石打ちによる殉教のあった34年に終結した。もちろん、紀元前1097年における、神と預言の霊を退けるという根本的背教によって始まり、ステパノが神の右に立っておられるキリストを見た時に終わるこの預言的系統の中には、他にも多くの深遠な年代的証言がある。この証言の中に、私たちはヨシヤの預言的輪を見いだす。

私はこれを「根本的背教」と呼ぶ。というのも、その系譜の始まりは、イスラエルがこの世の王を持ちたいと望んで神を王として退け、それによってイスラエルの人間的王政の基礎が据えられた時を示しているからである。私はまた、ヨシヤの輪のためにもこれを書く。ヨシヤは「神の基礎」を意味し、神の民の基礎と、その根本的背教の双方の象徴だからである。

ソロモンが死に、十二部族が北と南に分裂したとき、エロボアムによる偽りの礼拝制度の奉献は、不従順な預言者によって叱責され、その叱責の中には、ヨシヤという名の来るべき王についての預言が含まれていた。エロボアムと北の十部族の根本的背教の時に、紀元前622年の大過越祭によって特徴づけられるヨシヤとその改革復興の預言が語られたのである。その復興は、モーセの書の発見と、神の民の絶えざる背教に対するさばきの宣告によってもたらされた。モーセの書のことばがヨシヤ王に読まれたとき、それは旧約聖書の歴史における最大の改革復興を生み出した。将来、ヨシヤという名の子が生まれるという預言にはまた、不従順な預言者がエロボアム王に向けて発した、根本的背教に対する預言的断罪も含まれていた。

ダニエルがそう呼ぶところのモーセののろいは、レビ記二十六章の「七つの時」であり、それはアドベンチズムの基礎的真理の象徴であるウィリアム・ミラーの根本的発見となった。1840年8月11日におけるミラーの使命への力の付与は、1838年および1840年における「ヨシヤ」リッチの働きを通してもたらされた。1863年にそれらの土台は退けられ、「七つの時」は、フィラデルフィアのミラー派の基礎的真理の象徴であるだけでなく、土台に対するラオディキアのミラー主義の反逆の象徴ともなった。第一天使および第二天使のミラー派の歴史は、「ヨシヤ」の象徴性を有しており、それは十四万四千人の歴史において一字一句に至るまで繰り返されることになる。ヨシヤの輪は、サウル王の魔術にまでさかのぼり、さらに日曜法におけるラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会の吐き出しにまで及ぶ。エゼキエルにおけるヨシヤの輪は、今や十四万四千人の封印の頂点として、解き明かされつつある。

これらのことについては、次の記事で引き続き扱うことにします.